BOOK X — 見えざる戦争

第05章 — 沈黙の通信回線

01 — 回線の向こう側

階段を上り切ったところには細い通りがあり、ロイは眼下の地区の明かりを見渡すことができた。下の通りに面した建物のいくつかには、照明のついた看板があった。その向こう、線路を隔てた先に見える病院の明かりは、ほかの大きな建物の明かりと区別がつかなかった。

階段の途中で二度、足を止めた。上り切る少し手前で、下りてきた男に手を貸そうかと尋ねられた。ロイは礼を言い、もうすぐ着くからと答えた。

自分がどこへ向かっているのかも分からずに、そう答えていた。

階段の向かいにある建物の一階には、小さな食堂があった。ロイはスープを一杯注文し、窓際に座った。女が器を運んできたとき、スプーンを右側に置いた。ロイはそれを左側へ移した。

女はその動きに気づいたが、何も言わなかった。

ロイはゆっくりと食べた。歩いている間に右手の感覚は改善していたが、それが休息によるものなのか、単に負傷の別の段階に入っただけなのかは判断できなかった。肩の下には、腕をどの位置に置いてもほとんど変わらない違和感があった。

病院の医師のことを思い出した。治療中、イマニは二つの感覚の違いを説明するよう求めることがあった。必要がないように思えた質問もいくつかあった。尋ねてくれる人がいなければ、一種類の痛みと別の痛みを区別することがどれほど難しいのか、今になって分かり始めていた。

食堂の入口近くの壁には電話が取り付けられていた。その上の手書きの札には、客は市内通話を無料で利用できると書かれていた。ロイが入ったとき、配達用のバッグを持った男が使っていた。男はしばらく話し、回線の向こうの相手に謝ってから外へ出た。

ロイはポケットから自分の電話を取り出した。

レイチェルからの最後のメッセージがまだ残っていた。二人が落ち合う予定だった場所についてのものだった。彼女がまだそこへ向かおうとしているのか、それとも作戦について十分な情報を得て、すでに断念したのか、分からなかった。

しばらくの間、彼はレイチェルにごく簡単なことを頼もうかと考えた。無事だと知らせるメッセージを送ってほしい、と。

自分からも同じメッセージを送れたらと思った。

女が隣のテーブルの皿を片づけに来た。電話の調子が悪いのかと尋ねた。

「いいえ。連絡を取りたい相手が電話に出られるかどうか、分からないんです」

「必要なら、壁の電話を使っていいですよ」

ロイは礼を言った。問題は機器にあるのではないとは説明しなかった。

交通施設で始まった新たな取り決めについて聞いた話から、ある目的で作られた記録が別の目的に利用される可能性を理解していた。自分が送るあらゆるメッセージにも、同じ可能性があった。誰かの居場所についてのごく普通の問い合わせでさえ、その人物を捜している者たちへの指示になり得た。

レイチェル以外の誰がそれを受け取るか分からない限り、彼女にどんな情報を伝えても安全なのか、判断できなかった。

スープを飲み終え、勘定を払うためカウンターへ向かった。女はパンを持っていくかと尋ねた。二切れを袋に入れ、小さな水のボトルも添えた。

「今夜は冷えますよ」

外の通りには、ほとんど人がいなかった。ロイは照明のついた看板の下にしばらく立ち、左腕で袋を身体に抱えていた。

かつて彼は、沈黙とはもう語ることがなくなったときに始まるものだと思っていた。

レイチェルに伝えたいことは、いくらでもあった。彼はメッセージを送らずに歩き出した。

02 — 医療協会への問い合わせ

受付係が帰宅した後も、セラ・ミンは医療協会に残っていた。法務委員会の委員長から、保全された記録に関する要請への回答を作成するよう頼まれていた。合法的な査察への協力を拒否したと誤解されないよう、十分に明確な回答にしてほしいということだった。

ただ、査察そのものがもはや合法ではなくなった場合に協会が何をすべきか、その判断を求められることは望んでいないのだろうと、彼女は思った。

最初の草稿がほぼ完成した頃、イマニから電話がかかってきた。

医師は、病院の外にいる患者が予約した診察に出向けない事情を抱えている場合、助言を受けられる手続きが協会にあるかと尋ねた。

「いくつかあります」とミンは答えた。「患者自身が治療を求めているのか、それとも別の誰かが患者についての情報を求めているのかによります」

「治療を継続できなくなった男性のことが心配なんです」

「本人と話しましたか？」

「病院を出てからは話していません」

ミンは読んでいた書類を脇へ置いた。レイチェルとの会話から、その状況に心当たりがあった。医師は患者の名前を明かさなかったし、ミンも尋ねなかった。

協会には、随時相談に応じる独立医師の名簿があると説明した。主に、居住地区で診察を受けることが困難な人々のためのものだった。名簿自体が医療サービスを提供するわけではない。協会は問い合わせを取り次ぐことはできても、医師に治療を引き受けるよう義務づけることはできなかった。

イマニは、申告できる現住所のない人もその手続きを利用できるかと尋ねた。

「申し込む方が医師に直接相談できます。私たちは登録事務所ではありませんから」

「本人に代わって行動する人からの要請であれば？」

「問い合わせは受け付けられます。治療には本人の同意が必要です」

回線の向こうで、しばらく沈黙があった。

「それを確認しておきたかったんです」とイマニは言った。

今回の問題は行政上のものだけではない、と彼女は説明した。患者は通常の診察では不十分な負傷を抱えている可能性がある。必要な機器のない場所で治療を受けさせるよう、誰かに勧めることはしたくなかった。

ミンは患者を特定せずに医療上の要件を簡潔に記した文書を用意するよう頼んだ。協会は、問い合わせの検討に同意した医師にその文書を渡すことができる。

「もう一つ、もし誰かが彼の診察場所をあなたに尋ねたら、どうなるのかも心配です」

「合法的な命令に基づき、医師が何らかの情報を開示するよう求められないとは約束できません。ただ、誰かが取り決めに同意する前に、その問題を検討するようにすることはできます」

イマニはその限界を理解し、ありがたいと思った。ここ数日、保証を与えた人の意図だけを語ったにすぎなかったと後になって判明する言葉を、あまりにも多く聞いていた。

病院を出る前に文書を用意すると、ミンに伝えた。

「もう一つあります」と彼女は言った。「エイドリアンがレイチェルと話す必要があります。失われたページに関する参照情報を見つけたかもしれないそうです」

ミンは、レイチェルが再び協会に連絡してくるはずだと言った。二人の会話の内容を明かさずに、要請を伝えることができる。

通話を終えた後、ミンは手帳に二つの別々の記録を書き込んだ。一つは研究資料の保全に関するもの。もう一つは医療支援についての問い合わせだった。

同じファイルに入れた方が便利だっただろう。病院の事情を調べている政府機関のどこかでは、すでに同一の調査の二つの側面として扱われているかもしれない。

だが、便利だからという理由だけで二つを同じものにすべきではない、と彼女は思った。

03 — 参照番号

病院の研究棟では、エイドリアンが返却された書類を、普段は機器の点検に使われるテーブルの上に広げていた。室内の作業端末の大半は接続が切られていた。残った端末では病院の管理システムにアクセスできたが、実験データが保管されていた元のリポジトリにはアクセスできなかった。

記録管理室の職員が、失われた付属資料に関する記載の紙の写しを持ってきていた。そこには日付、文書の参照番号、最後の改訂を発行した部門の名称が記されていた。

エイドリアンは、その記載が改訂を受領した時点で入力されたものかと尋ねた。

「通常は、日付はそれを意味しています」と職員は答えた。

「このシステムにいつ入力されたか、確認できますか？」

古い台帳を調べる必要があると彼女は言った。研究室の機器が設置される以前に、別の管理システムから移された資料がいくつかあったのだ。

彼は礼を言い、職員は持参した写しを手に部屋を出ていった。

その日の早い時間に、参照番号を病院への供給物資に使われる書式の番号と比較して書き留めたメモを見た。二つには似通ったところがあった。だが、同じ資料を指していると証明できるほどではなかった。書式の古い記録を入手できれば、番号の付与手続きがいつ導入されたのかを確認できるかもしれない。

問題は、その書式に関係部門が供給元として記載されていることだった。試料を供給した者がその製造者であることも、試料を採取された本人に対して継続的に責任を負うことも、書式のどこにも明記されていなかった。

自分の一族の事業に関わる多くの人々を知っていた彼には、自らの製品の出所について質問に答えたくない組織にとって、その区別がどれほど都合の良いものか分かった。

書類を眺めていると、イマニが入ってきた。

「ミンがレイチェルと話せるよう手配してくれるそうよ」

職員が探してくれることになったものについて、彼は説明した。

「付属資料が改変されたと思うの？」

「改訂はされている。その改訂が試料の到着前なのか、到着後なのかを確かめたいんだ」

「もし到着後だったら？」

「それでも、何が変更されたのかを知る必要がある」

イマニはテーブルへ椅子を引き寄せた。手元に残っている資料の中に、異常な結果を示した試料の出所を確認できるものはあるかと尋ねた。

ない、と彼は答えた。

「なら、確認できたとレイチェルに伝えるべきじゃないわ」

「そのつもりはない。ただ、元の記録を持っていた部門を特定できる可能性はある」

イマニは印刷された番号を調べた。予備研究が、百年計画の起源とは切り離して調査できる何かを生み出しているように思えた、短い期間を思い出した。最初の有用な成果が修復された組織の安定性という、特に劇的でもないものに関する結果である可能性を、彼女は喜んでいた。

今では、使用された資料の一部の来歴にも触れずに実験について説明することは、難しくなりつつあった。

エイドリアンは別の紙を取り、レイチェルに尋ねたいことを書き出した。部門名は書かなかった。その名称が、記録の作成当時に存在した組織のものかどうか、確信できなかったからだ。

「普通の回線でこのことを話せないなら、何を話せるんだ？」と彼は尋ねた。

「何を保全する必要があるのか。何がまだ分かっていないのか」

彼は、元の試料についての参照情報があるはずだった空白部分を見つめた。

この部屋には、生命を延ばそうとする試みに関する相当量の情報があった。その情報の一部を可能にした生命の持ち主が誰なのかだけは、依然として欠けていた。

04 — 未回答の要請

人員管理施設の係官は、夕方の職員交代の少し前にM-06から二度目の要請を受け取った。彼女の前でそれを読み、路面電車のホームでの遭遇に関する報告の修正として提出したいのかと尋ねた。

「いいえ。今後の遭遇に関するものです」

「そのような任務は割り当てられていない」

「もし起きた場合、私に何をすることが許されるのか知りたいのです」

作戦条件の変更に関する要請は、その作戦を担当する司令部から出さなければならない、と係官は説明した。その司令部に問い合わせを取り次ぐことはできるが、自ら変更を承認することはできなかった。

M-06は最初の要請が取り次がれたかと尋ねた。

係官は端末を確認した。統合参謀部とその件について協議したことを示す記録があった。それ以降の指示は届いていなかった。

「では、まだ審議中なのですね？」

「回答されていない」

彼女は書式を見た。そこには、その違いが示されていなかった。

廊下では、宿舎へ向かう夕方の送迎車を待つM-04を見つけた。彼には翌日も施設での任務が割り当てられていた。M-06は、要請について係官から聞いたことを伝えた。

M-04は病院の医師と誰かが話したのかと尋ねた。

「話したと思う。医師が何を伝えたかは見ていない」

作戦用医療概要の一部にはアクセスが認められていたはずだ、と彼は念を押した。彼女はその概要を読んでいた。対象者の近時の能力についての推定と、負傷の可能性に関する留保が記載されていた。治療に関する指示は含まれていなかった。

M-06は人員管理施設の外にいる医師と連絡を取ったことがあるかと尋ねた。

「一度だけ」

「許可されていたの？」

民間職員の診察のために医師が施設に派遣されたのだ、と彼は言った。機器で職員の一人が負傷したとき居合わせていたため、事故がどう起きたのかを医師に話したのだという。

「あなた自身について聞いているの」と彼女は言った。

「ない」

二人は黙って送迎車を待った。

事務室では、係官が既存の記録に新たな要請を追加していた。統合参謀部に通知を送る前に、もう一度書式を確認した。独立した診察の要請は、常設の指示によって禁じられてはいなかった。問題は、確保命令の対象者がどのような状況で通常の患者として扱われるのか、指示に定められていないことだった。

彼は意見を添えずに要請を送信した。

司令センターではデレンがその写しを受け取った。ポンプ場での遭遇に関する報告と並べて読んだ。二つの文書から、ロイ・バッティに関する次の判断を、新たな医療情報なしに下すのは妥当ではないと考えた。

彼は医療部門に電話し、独立した診察を手配するのにどのような権限が必要かを尋ねた。

そこにいた係官は、提案された診察が作戦の中断に当たるかどうかを確認しなければならないと答えた。

「診察だ」とデレンは言った。「確保命令の変更ではない」

「終了後、対象者は自由に立ち去れるのでしょうか？」

デレンはすぐには答えなかった。

もっともな質問だった。そして、患者がまだ病院にいたときに誰も答えようとしなかった質問でもあった。

医療担当官に、文書にして提出すると伝えた。その前に、机の上のファイルから最初の承認書を探した。

文書のかなりの部分には、対象者の身柄の移管先となり得る当局の義務が記されていた。その当局が本人との話し合いに同意し、その後は自由に立ち去らせる可能性については、何の規定もなかった。

05 — 住所のない通信

翌朝、レイチェルが協会に到着したとき、ガラス扉の通常の受付時間の表示の横に告知が貼られていた。病院の記録の移管に関する問い合わせは、法務委員会へ向けるよう一般の人々に知らせるものだった。

中断された研究についての言及はなかった。

二階の事務室にミンがいた。法律顧問は病院に送った声明の写しを渡し、イマニとの会話について話した。

「彼から連絡はあったんですか？」とレイチェルは尋ねた。

「いいえ。ただ、彼があなたかイマニ医師のどちらかに連絡してきたとき、診察の手配に役立つ情報を用意してくれています」

レイチェルは腰を下ろした。その知らせはうれしかったが、最後に会ったときのロイの状態を、もう一度思い出さずにはいられなかった。

「もし彼がここへ来られるなら、手配してもらえるんですか？」

「おそらく。ただ、移動する前に本人が医師と話す方がいいと思います。イマニ医師はその点を特に気にしていました」

ミンは前日に話し合った公開の連絡先を見せた。協会はその連絡先でレイチェル宛てのメッセージを受け取ることができた。また、電話してきた人が通常の医療相談を希望する場合には、その方法を教えることもできる。

「どちらのサービスも秘密が保証されるものではないと考えてください」とミンは言った。「普通のサービスです。大切なのは、必要以上の情報を相手に求めないことです」

レイチェルはカードを受け取った。

「彼には、これがどういう意味なのか分かるでしょうか？」

ミンは、レイチェルが市内の専門職団体のいずれかに協力を求めるつもりだったことを、ロイが知っているかと尋ねた。

「病院でその話をしました。ここの名前は出さなかったと思います。どの団体が力を貸してくれるのか、私にも分かりませんでしたから」

彼女は机の上の電話を見た。自分に何が起きたのかをロイに知らせながら、ほかの人々には自分の居場所を伝えないようなメッセージを、何度か書こうとした。いつも、どこか削りたい部分が残った。

ロイを協会に紹介することで、そこで働く人々が注目を浴びる可能性があると分かっていた。公開の連絡先を彼に送っても差し支えないかと、ミンに尋ねた。

「そこに伝言を残してほしいのであれば、構いません。私が彼に来るよう求めている場所ではありませんから」

最初に考えたとき、レイチェルはその違いに気づかなかった。一人が連絡を受け取る場所と、もう一人が連絡を残す場所は、同じである必要はなかった。

ミンは受付係と話すために出ていった。レイチェルはカードを手に事務室に残った。そこには普通の電話番号と、ごく普通の組織の名称があった。協会が人工生命の寿命に関する研究資料の写しを受け取ったことを示すものはなかった。

あの作戦が存在しなければ、このカードが必要になることはあったのだろうか、と彼女は思った。

ロイに、協会まで来られるかどうか尋ねようとしていた。その代わりに、彼からの連絡をそこで受け取れるようにしたことを書いた。居場所を教える必要はない。できるようになったときに連絡してもらえたらうれしい、と。

公開の電話番号と協会の名称を添えた。イマニにも研究にも触れなかった。

メッセージを読み返した。最後の一文は十分ではないように思えた。長い旅に出た人に書くような言葉だった。

彼女は短い一文を付け加えた。

ここに来なくていいの。

そして送信した。

電話には送信時刻が表示されたが、相手が受信したことを示す表示はなかった。

ミンが戻ってきたとき、レイチェルはまだ画面を見ていた。返事があったかどうか、ミンは尋ねなかった。

06 — 通信の中断

司令センターでは、朝の会議の前に夜間の捜索報告が印刷されていた。ポンプ場での遭遇を除くと、前日の目撃情報からはロイ・バッティの身元を確実に確認できなかった。ほかの十一件の照会は、関係する人物の身元が確認された後、終了していた。

報告を行う将校は、十一件の照会が終了したことを、新しい報告手続きが機能している証拠とみなしていた。

デレンは、そのうち何人が日常の用事を済ませていた場所から立ち去るよう求められたのかと尋ねた。

将校は、その数は概要には載っていないと答えた。

「確認できるか？」

「各地区の司令部に問い合わせることはできます」

ヴェイル大佐が二人の会話を遮った。統合参謀部から、報告体制を一部の通信サービスにも拡大する要請が届いていた。提案は作戦に関連する限定された種類のアカウントを対象としていた。大佐は連絡調整を担当する将校に手続きを説明するよう求めた。

連絡担当官は、指定されたアカウントが通信サービスを利用できる状態になったときに通知を発行できると説明した。その後、追加の承認に基づき、通信に関係するアカウントについての情報を要求できる。

デレンは文書を見た。その取り決めが適用されるアカウント数は明記されていなかった。

「どのアカウントを指定するかは、誰が決めるんだ？」

「通知を所管する当局です」

「我々のことか？」

「すべての件でそうとは限りません」

彼は現在の一覧を求めた。文書の配布について短い議論があった。統合参謀部は、会議の出席者全員への開示をまだ承認していなかった。

ほかの将校たちが去ってから、デレンはヴェイルに、その取り決めには治療の過程で行われる通信も含まれるのかと尋ねた。

「規定は、行動が作戦に関係する人物の特定に関するものだ」とヴェイルは言った。

「患者の行動には、医師に連絡しようとすることも含まれます」

「分かっている」

「それが判明したとき、我々は何をすべきなんです？」

ヴェイルは、司令部には対象者を確保する責任があると言った。拘束下にある者の治療については、既存の規定がある。

デレンは拘束されていない状態での治療について要請を提出したと言った。いつ回答が得られるのか知りたかった。

「見たよ」とヴェイルは言った。「所管の当局へ送られている」

大尉は、その当局がどこなのかを尋ねなかった。最初の承認書に名称が記されていたが、実際に判断を下す人々が誰であるのかは、その名称からは全く分からなかった。

数本離れた通りにある通信事務所で、一人の職員が最初の一連の通知を受け取った。裁判所の要請に基づいてサービスを停止する通常の手続きには慣れていた。今回の指示は一覧にあるすべてのアカウントを停止するよう求めるものではなかった。中にはサービスの利用可否を確認し、追加の指示を待つべきものもあった。

そのうちの一つは病院に関連するアカウントだった。査察に関連する通信についての一般的な指示の下に登録されていた。職員は上司に、電話サービス自体は利用可能なままにするのかと尋ねた。

そうだ、と上司は答えた。

通信の受信者には、指示が届いていることを知らせるのかと尋ねた。

上司は文書を確認した。受信者に知らせる義務はなく、受信者がそのことを問い合わせられる規定もなかった。

職員は必要な入力を終えた。どの会話についても、その内容を知らされてはいなかった。一覧に載ったアカウントの利用者同士が、これまでに話をしたことがあるのかどうかすら知るすべはなかった。

作業が終わったとき、病院のアカウントのサービス状態には何の変化もなかった。利用者が何も起きていないと判断しても無理はなかった。

07 — 伝えられること

正午少し前、研究室の電話が鳴った。エイドリアンが出た。電話の相手は医療協会の職員だと名乗り、研究資料の保全に関する件で、ある人物と話すことができるかと尋ねた。

少しして、レイチェルの声が聞こえた。

「エイドリアン？」

「ああ」

二人はあらかじめ、予備試験の参加者を特定できる情報を会話に含めないようにと伝えられていた。ミンはレイチェルのそばにおり、イマニもエイドリアンと共に研究室に残ることに同意していた。

数秒の間、どちらも話さなかった。レイチェルが彼の声を聞くのは、病院を出て以来初めてだった。

「そちらはどう？」と彼女は尋ねた。

「機器の大半は接続を切られた。部屋はまだ使える」

保全された書類の受領確認を受け取ったかと、彼は尋ねた。彼女は受け取ったと答えた。

「よかった。それを保管しておいてほしい。記録について確認したいことがいくつかあるんだが、今日話す必要はない」

レイチェルは、失われたページを入手できたかと尋ねた。

「まだだ。そこに付された参照番号について、何か確認できるかもしれない」

「供給書式にあった参照番号？」

「そうだ。あれでは資料の出所までは確認できない」

記録管理室に何を探してもらっているのか、彼は説明した。試料のどれかに言及しなければならない詳細に差しかかるたびに言葉を止め、それを持ち出さずに問題をどう説明するか考えた。

ミンは二人のやり取りを聞いていた。その資料の科学的な意味はほとんど理解できなかった。ただ、二人のどちらも完全な形では持っていない文書について、その来歴を確かめようとしていることは分かった。

エイドリアンは、試験の最初の説明書が作成されたとき、完全な付属資料を見た覚えがあるかとレイチェルに尋ねた。

「一部は見たわ。私が見た写しには、追加資料のための独立したページがあった。それが完全な付属資料だったかは分からない」

彼は礼を言い、彼女が語ったとおりにメモを取った。

イマニが電話を代わった。独立した医療支援を手配できる可能性があることをレイチェルに伝えた。まだ誰かが患者を診ることに同意したわけではない。どのような機器が必要なのか、入院せずに必要な診察を行えるのかという問題が残っていた。

レイチェルは理解したと答えた。

「何か知らせはあった？」とイマニは尋ねた。

「いいえ。メッセージは送ったんですが」

医師は、尋ねるべきでない質問が何なのか分かっていた。レイチェルがどこにいるのか、きちんと食べているのか、滞在できる場所があるのか知りたかった。病院につながる回線でその答えを聞くことが、レイチェルにとって有益かどうか確信できなかった。

協会に連絡を取ってくれてよかった、と伝えた。

「別の場所でこの話ができたらよかったのに」とレイチェルは言った。

「私もそう思うわ」

会話が終わると、エイドリアンはテーブルに戻った。追加のページについて書き留めたメモを見た。失われた文書について新たに得られた情報は、それだけだった。文書を取り戻す助けになるのかは分からなかった。

イマニは医療上の要件に関する文書を入力し、ミンに送ると言った。自分の事務室へ行こうとしたとき、記録管理部門の職員が戸口に現れた。

職員は古い台帳に記載を見つけていた。付属資料の参照情報が別の機関で管理されていたシステムから移されたことが示されていた。移管元の機関名は台帳になかったが、移管を特定するために使える番号があった。

エイドリアンは礼を言い、その記載の写しを提供してもらえるかと尋ねた。

「開示の許可を申請してあります」と彼女は答えた。

もう一度レイチェルに電話したい気持ちになった。だが、やめることにした。実際に調べることのできる文書が手に入るまで待とうと思った。

08 — まだ届かない返事

翌日の夕方、地区の緊急対応事務所にいた女が、前日に負傷した保守作業員についての電話を受けた。その職員が市営の診療所で診察を受け、帰宅したことを確認できた。問い合わせをした人物は礼を言って電話を切った。

彼は、捜索中に報告された出来事について情報を得るようデレンが頼んだ将校の一人だった。ポンプ場が彼の一覧に載っていた。事務所を出る頃には、その場所に居合わせた人々についてかなりの情報を得ていたが、彼らが立ち去るのを目撃した人物の状態については、何も分からなかった。

デレンはその報告を読み、独立した診察に関する要請に添付した。その要請への回答はまだ届いていなかった。

人員管理施設では、M-06が翌朝の別の説明会に出席するよう伝えられた。対象者に関する指示に変更があったかと尋ねた。

職員は、指示は説明会で伝えられると答えた。

廊下でM-04を探したが、彼はすでに建物を出ていた。入口の近くにしばらく座り、送迎車を待つ職員たちを見ていた。

バッティはまだ動けるのだろうかと思った。路面電車のホームで彼女のもとから立ち去るのは、彼にとって比較的容易なことだった。M-08から聞いた話では、危険に陥った場所を離れることは、今ではそれほど容易ではないかもしれなかった。

追跡している人物の身体状態の変化を見分ける訓練は受けていた。しかし、追跡するという行為そのものが、その変化を引き起こす一因となっているならどうすべきか、誰も教えてくれなかった。

上層地区ではロイが、いくつかの小規模事業者が利用する建物の入口にある公共の待合室に座っていた。建物を管理する女が、夜の施錠まではそこにいてよいと伝えてくれた。ロイは礼を言い、扉から離れた場所に座った。

ほとんど眠ることができていなかった。肩の違和感は再び変化し、腕を動かさないようにしていた。その日の早い時間に、電話に通常のサービス利用可能の表示が出なくなっていることに気づいた。電話に問題があるのか、サービスそのものに問題があるのかは判断できなかった。

残りの充電を温存するため、電源を切っていた。

今、もう一度電源を入れた。画面がいつもより少し遅れて点灯した。しばらくは新しい情報が何も表示されなかった。

折り畳んだ傘を手にした男が建物に入ってきた。入口で傘の水を振り落とし、待合室を横切った。ロイは男が階段を上っていくのを見ていた。

電話に視線を戻すと、画面にメッセージが表示されていた。

レイチェルからだった。

身じろぎもせずにそれを読んだ。知らない協会の名称を読み、自分の居場所を伝える必要はないと書かれた一文を読んだ。

それから、最後の短い一文を読んだ。

彼女がどれほど自分に来てほしかったかを、彼は知っていた。そうではない言葉を書くために、どれほどの努力が必要だったかも分かっていた。

返事を書き始めた。生きていることを伝えた。番号を受け取ったことを伝えた。もうすぐ明かりが消される建物で待っていることも、まだ医師の診察を受けていないことも、書かなかった。

最後の一文でためらった。伝えたいことを、彼女に何の害も及ぼさないと確信できるメッセージに書くことはできないように思えた。

結局、話せるようになったら連絡すると書いた。

画面にはメッセージが送信待ちであることを示す表示が出た。彼は数分間、その表示を見つめた。

協会では、レイチェルはすでに電話をバッグの中に入れていた。夕方じゅう待合室にいるようなことはしないとミンに約束していた。行く場所はあったし、協会は朝になればまた開く。

階下に降りて、受付係に礼を言った。外では雨がほとんどやんでいた。

ロイは画面がよく見えるよう電話を傾けた。メッセージの横の表示はまだ消えていなかった。

二人が別れて以来初めて、自分の言葉が届くことをレイチェルが待っている場所が、この街のどこかにあるのだと分かった。

その言葉が、まだ自分のもとを離れたのかどうかも分からなかった。

第05章 終。